

しのはら歴史便り

篠原地区歴史同好会／浜風会会報 No.20

浜風会/入会募集中
毎月第1,3木曜日

篠原の玉葱が変わる

一昨年から昨年にかけて、篠原の畑の様相が大きく変わってきたことに、気付かれた方が多い筈である。荒地や遊休農地を新しい玉葱畑に再生する事業が始まったのである。篠原農業にとって一大転機のありがたい趨勢である。ここに至る歴史から振り返ってみる。

玉葱の特産物化は大正十年

明治四十四年に田畑に住む加藤音吉という人が、実家のある知多から種子を導入したのが、この地における玉葱栽培の始まりである。その後作付面積を徐々に増やしてきたが、篠原村農会の指導で大量の種子を和歌山県から購入し、篠原の玉葱の特産物化しようとしたのは、大正十年のことであった。〔浜風と街道〕

日本の早出し玉葱

和歌山県、大阪府や愛知県から購入していた種子を、農協や篤農家の尽力で自家採種に取組まれたのは昭和二十八年である。それ以来毎年母球の選抜栽培が繰り返され「極早生」品種により、現在では年内にも出荷される白玉葱の「サラダオニオン」と黄玉葱の「新玉葱」として日本一の早出し玉葱の体制が出来上がってきた。その一方で課題も迫ってきた。

篠原玉葱にとつての差し迫った課題

最大の課題は平均年齢七十四才位と想定される高齢化と、農業後継者がいない世帯の割合が約三分の二を占める等からくる、遊休農地や耕作放棄地の急速な増大で、百畝を割り込むとする耕作面積。そして約十億円までになったとされる玉

葱生産の縮小化である。

その救世主になれるか(株)とぴあふあー夢

そんな中、平成二十二年七月、「(株)とぴあふあー夢」が設立した。減少する玉葱生産出荷量増加する遊休農地・耕作放棄地の課題を解決するため、新たな担い手の育成、農地利用集積円滑化事業を活用し、玉葱産地振興を図る仕組みを目指したJA出資型農業法人である。

具体的には、「JAとぴあ浜松」が、遊休農地や耕作放棄地の地権者から農地を借り受け、次の優先順位で、①地域の農業者、②地区(西地区)の農業者、③管内(JAとぴあ浜松)の農業者《に貸し付けていく。それでも借り手が無い場合は(株)とぴあふあー夢が当面耕作する。

即ち遊休農地を耕作しながら集積し、やる気のある農業者へ転貸していき、集積した農地の受け手がいない場合は、「がんばる新農業者支援事業」の研修生を受け入れ、のれん分けを行う。そして同法人では農業機械の貸出しや作業受託を事業化し、農業者をサポートしていくこととするものである。

耕作地再生へ生みの苦しみ数々

目標の十畝の耕作放棄地の再生は草刈り、天地返えからスタートしたが、下からマルチシート、大小様々な石、鉄パイプやアスファルト残骸

等が出て、作業は最初から難航した。

土壌改良と土壌消毒では、この地域特有の強風で、百五十cm幅のマルチシートが、飛ばされ畝立がうまくできない。育苗が不足し、全自動定植機の使用断念、その他除草作業、大雨で排水不良が長く続き、苗が枯れてしまった等、問題が次々に出て予定どおり進まないことが多かったそうである。その都度関係者の協力で対応して乗り切っている。

新しい風が吹き始めた篠原の玉葱畑

他地域からの若い農業者が活躍し始めた。自動種蒔機、自動定植機等機械化、大規模化とそれに伴う四条植えの台頭。

玉葱に適したこの風土が蘇りつつある中、この地区に住む住人、特に若人に期待したい。

「(株)とぴあふあー夢」の理念―農業に夢を与え、農業で夢を実現させ、農業を次世代へーに期待を込め見守りたい。

JAとぴあ浜松にご協力いただきました。

平成23年度主な活動

- ★ 山下孝先生講座
- ①奈良・世界遺産の裏表
- ②広重五十三次→街道の見方
- ★ 本年のテーマ
- ・ 合併頃の史実掘り起し
- ・ 郷土資料室新テーマ揭示
- ★ 主な自由研究
- ・ 篠原村誌増補篇と昭和の時代
- ・ 加宿と助郷
- ・ 終戦直後の塩づくり
- ・ 年貢皆済手記より
- ・ 篠原旧街道の店模様
- ・ 東南海地震と大震災
- ・ 井伊氏と日蓮上人
- ・ 浜名湖上交通の変遷等
- ★ バス旅行/小旅行
- ・ 近江路を訪ねる「彦根城」
- ・ 郷土の偉人記念館巡り

遠江井伊氏と日蓮上人

一. はじめに

わが町馬郡町は、西馬郡と東馬郡の二つの地区に分かれている。西馬郡地区には、日蓮宗の東本徳寺と西本徳寺がある。地区の家々の宗派は殆どが日蓮宗で、この寺の檀家である。これは六百余年前、身延山十一代管長の日朝上人が全国行脚の折この地を訪れた。その際村民の希望により、日朝上人を開祖として日蓮宗の二寺が建てられたことによる。

さて、この日蓮宗の開祖である日蓮上人が、藤原氏の流れを汲む井伊谷の井伊氏の出であるということを知った。それは最近井伊氏の菩提寺である龍潭寺から出版された「遠江井伊氏物語」に記載されていることによる。

この日蓮上人が井伊氏の出であることについて、家紋が井伊氏と日蓮上人は井桁に橋で同じであること。また十年程前、同窓会の折、袋井の土屋君から袋井の町に日蓮上人ゆかりの妙日寺があること。ここには上人のご両親の墓があることなどを聞いた。それで妙日寺を尋ねて、住職の説明も聞いたが、井伊氏との関係については十分な理解が得られないままであった。

二. 井伊氏のこと「遠江井伊氏物語」より

井伊氏は、名門藤原氏より出ていると井伊氏系図は記している。平安時代、藤原良門の流れを引く藤原共資が、遠江守として遠江国村櫛の郷に下る。その共資の養子となった地元の共保を井伊氏の祖とする。

初代共保は、寛弘七年(一〇一〇)出生、寛治七年(一〇九三)に没している。共保には正月元旦、滑伊八幡宮の御手洗の井戸より生まれたとの伝説が残されている。共資の養子となつ

た共保は、後に井伊谷に居を構え、姓を井伊と改め井の形である「井桁」と傍らに咲いていた「橋」を家紋としたと伝えられている。

共保に至る系譜には諸説がある。地元に残る一説には、律令期井伊郷に下つた田島守の後裔に三宅好用なる人物がいる。その四代目井端谷篤茂の女の子が共保であるという。井伊谷にある二宮神社は、前身が三宅氏の田島守を祀る式内社三宅神社であつたと神社史が伝えている。

三. 各時代の井伊氏

平安時代、共保没後六十年の保元元年(一一五六)保元の乱が起きる。後白河天皇方の源義朝に従つた遠江の武士として横地、勝間田、井の八郎の名が「保元物語」に登場している。日本歴史十世紀頃は、全国的に武士が出現している。井伊氏は遠江の武士団横地、勝間田と共に東国に拠点を持つ清和源氏を棟梁と仰ぎ活躍している。井の八郎と共に働いた横地氏の本籍地菊川市には興味深い伝承が残っている。それによれば、横地氏の祖太郎家永は前九年の役奥州で安倍氏討伐に向かつた源義家の子である。その三代目横地永宗二十五歳が保元の乱で源義朝を助けて戦功をあげたと伝えられている。

鎌倉時代に入り源頼朝が征夷大將軍となる。東大寺供養に上京の際、供奉十一番目に井伊介、横地太郎、勝田玄蕃助と「吾妻鏡」にある。尚この時代の井伊家系図に先述した貴名井伊氏の末裔に日蓮上人の名が記載されている。南北朝時代には、遠江井ノ介が宗良親王を井伊奥山に迎えて立て籠ると太平記にある。

四. 井伊氏の危機

戦国時代になると井伊氏は今川氏のために

井伊氏当主ら相次いで亡くなる受難時代が続く。二十代直平、今川義元の配下となる。三男直満、四男直義駿河に召還され義元により誅殺。二十一代直宗、今川氏西進策で田原で戦死。二十二代直盛、桶狭間で、義元と共に戦死。二十三代直親、掛川城下で今川軍により誅殺。二十四代直政誕生。幼少期は難を避け鳳来寺で過す。こうした危機を乗り越え、成長して徳川家康に仕え、徳川四天王の一人として活躍し、彦根藩主十八万石の大名となる。なお三十六代直弼は、幕末期大老として開国したことで知られている。なお四十一代直岳は現在彦根市に在住している。(次号に続く)

井伊氏略系図

- 藤原鎌足……良門……共資——井伊共保——①
- ② 共家——共直——惟直——道直——盛直——良直——
- ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦
- ⑧ 彌直——泰直——行直——景直——道政——高頭——
- ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬
- ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ 時直——顕直——諄直——成直——忠直——直氏——
- ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ 直平——直宗——直盛——直親——直政——直孝——
- ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ 直澄——直興……直弼……直豪……直岳

○数字は井伊家始祖 井伊共保からの歴代

(彦根藩文書調査団 歴代戒名一覽による)

浜名湖上の交通の変遷

はじめに

篠原地区には河岸かしと呼ばれる船着き場が、明治時代から数か所みられた。舞阪駅の近くで駅に運ばれた餌を養鰻池に配達するためや、湖北奥山半僧坊への参詣に向かう定期船等のため、湖上交通を支えていた。

江戸時代の湖上交通

徳川幕府は政策上、新居と気賀に関所を設け、東海道の交通を取り締ると同時に、旅人や商用荷物が密かに湖上を渡らないよう、沿岸の村々に監視させ、舟による交通を制限し、漁や藻草の採取や作業場通い、今切渡船、関所管理の公用など、限られた物資や人のみ許可されていた。

井ノ田川掘割(堀留運河)

明治維新となって関所が廃止され、湖上の交通は自由となったが、交通機関は手こぎ舟による和舟しかなかった。

浜松の地は船舶の投錨可能な湊は無く、舞阪・新居の今切湊や掛塚湊までの物資の陸上移動の費用は甚大であった。

このため浜松藩の勤番組頭(廃藩置県まで浜松城代)井上延陵と副組頭の田村弘蔵の二人で明治四年(一八七二)に運河を計画し、上新町(浜松市菅原町)と入野村(浜松市入野町)まで延長八五〇間(約一五二〇呎)幅四・五間(約八・一呎)で、地域の有力者に出資を求め、田畑二九町歩を買収し、近隣の十二力村から無報酬の見舞(掘割)人足と称する延二千五十九人の協力により完工した。

新所村(日の岡) 航路

運河開通と共に会社組織「浜松堀留会社」に

より営業を始め、和舟による浜名湖対岸の新所西方村小アミヤまでの通航が開始された。所要時間は五〜六時間で、運賃は一人八錢五厘(川かかり税一錢五厘を含む)であった。なお待合所(通航立場)に乗客十二人が溜まると、舟一艘が出る規定で、急ぐ場合は十二人分運賃を支払えば二〜三人でも舟を出すことも出来た。

明治七年には一日三百人を超える利用者があり、名古屋方面からは、陶器、穀類、味噌醬油などが、浜松からは塩、薪、炭、油類、ろうそく、茶、畳表などが運搬され、地域の殖産興業に寄与した。

一方対岸の新所村小アミヤでは村長の伊藤安七郎翁を中心に地名を「日の岡」に改称すると共に豊橋方面との新道を開通させ、地域の興隆に努めた。

その結果堀留運河と浜名湖の水路を通る浜松・豊橋間は、東海道で最も近い路となった。

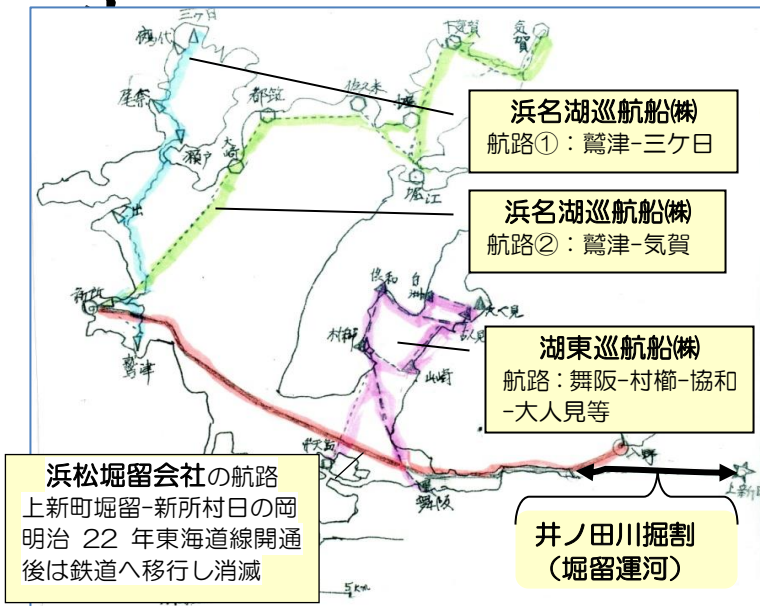
当時豊橋・浜松間の郵便物は、豊橋から日の岡までは、郵便馬車と郵便脚夫で運送され、湖上と堀留運河間は、船会社により三丁櫓の舟で、そして運河の荷扱い所から浜松郵便局までの陸路は脚夫により肩担ぎで運搬されていた。

井上延陵の実績

- ① 明治元年(一八六七)浜松城主となり、明治四年(一八七二)に堀留運河を成功させた井上延陵翁は、その他次のような実績があった。
- ② 土族授産のため明治四年(一八七二)成子町に勸工場かんこうばを設けた。
- ③ 明治七年(一八七四)四月、浜松宿伝馬町の小野組大火災に際し、罹災者の救援この間浜松宿伝馬町に第八十二国立銀行の設立(明治十一年)、頭取となり、

遠州地方の重要金融機関とした。その後の湖上交通の発達

新所村日の岡でも「新所渡船組合」が会社に改組されると共に、交通機関の発達に着目し、近代郵便の父と言われる前島密の斡旋により、明治九年(一八七六)には伊藤安七郎翁が堀留会社と提携し、浜松町上新町堀留・新所村日の岡間に汽船の航路が設けられ、一日四往復した。続いて東海道線開通後は、吉津村鷺津駅を本拠とする巡航船が湖北の各地を結びように発展してきた。(左図は明治四十年頃の定期航路) 参考資料 「堀留運河(資料編)」 「湖西文化誌二号及び十二号」 「浜名湖の自然と歴史と文化」 「遠州地方の交通発達史」



地域文化賞受賞

浜風会会長 山下勝彦

浜風会は昨年十月十一日に、図らずも浜松市より平成二十三年度の浜松市教育文化奨励賞（地域文化賞）をいただきました。

身に余る光栄です。ご指導いただいた山下孝先生はじめ、中央図書館、博物館等の先生方、また様々な場面で資料提供いただいた皆



受賞後の例会での報告会

皆さんに感謝申し上げます。合せ会員各位の尽力、協力にもお礼を申し上げます。

先ず活動経過を述べます。

山下孝先生との出会いが浜風会のスタート

昭和六十二年、篠原小学校で教頭をされていた山下孝先生との出会いが、今ある浜風会に繋がったと言えます。「篠育会」の「家庭教育を考える会」で、山下孝先生から青少年の健全育成には、自分達の住んでいる所に愛着を持たせることが大切だ等、こんこんと教えられたことを思い出します。それがきっかけで、わが町文化誌『浜風と街道』が出来たわけです。その編集仲間が、もっと勉強しようと山下孝先生の講座で再度集い発足したのが浜風会です。名前もその『浜風と街道』から取っています。

子供達に地域の歴史を解り易く伝える

先生の講座が終了した後も、自分達で古文書等をおし、中央図書館や、博物館の先生方にもお世話になりながら、地域の歴史を掘り起してきました。そしてそれを解り易く伝えようと次のような成果物を発表してきました。

- ・「篠原村誌」、「篠原村誌続編」の復刻
- ・小学校へ「ふるさと資料室」の開設
- ・「私の戦争体験」発行
- ・「ふるさとウォーキングマップ」の発行
- ・「里程標」の博物館への寄贈
- ・「篠原地区の年表」を公民館へ設置等

浜風会会報「しのはら歴史便り」発行

主な活動は毎月二回の例会で、各自の研究成果を発表しあっています。

平成十四年からは、活動の成果を更に多くの方に知ってもらおうと会報を発刊しました。

年に二回、今回で二十号になりました。毎号三百部又は四百部印刷して、篠原小学校、中学校はじめお世話になっている中央図書館、博物館等に配付する一方、公民館に置いて誰でも読めるようにしています。この会報はご覧のように多くは毎号、四つのテーマに絞り限られた紙面の中で解り易くをモットーとしています。

今後の活動

浜風会は発足以来続いているメンバーに加え、今年に入って新しいメンバーも増え、現在二十八名で活動しています。

最近世の中の動き解らなくなってきました。私達は何をすべきか？これからどうなっていくのか？等考える際、《歴史》に大きなヒントがある気がします。いっそう歴史に謙虚に向き合うことから出直したいと思えます。今後共よろしくお願ひします。

浜風会会報第20号
 浜松市篠原公民館同好会「浜風会」
 （篠原地区郷土の歴史を学ぶ会）
 編集委員 委員長 鈴木清
 鈴木義雄 鈴木幹久 鈴木忠
 山下勝彦
 発行責任者 山下勝彦
 発行平成24年1月1日
 連絡先：篠原公民館気付